ール酸を証明しなければならない。そこで注意を必要とするのはタムノール酸があるからK+黄，P+黄と簡単に結論してはならない。*U. florida* は体内のタムノール酸の存在が均一ではない。Motyka (Monograph p. 241) は髄の反応として K fere— と書いて居る。然しこんな時でも子器托の髄はどうやら K+，P+ のことが多い，従てタムノール酸を確証するには標本の破片を先づベンゼンで温浸しウスニン酸を除き次で温アセトンの浸出液を蒸発して得たエキスをクロマトグラフィーで処理する必要がある。アセトン・エキスが稍々多量にある場合には G. A. An. 試薬を加へてデッキグラスの下で徐々に加温し気泡 (CO_2) の発生と冷後デカルボタムノール・アニルの結晶の成生を確認すべきである。

又二，三年前黒川道博士の台湾採集品中の *Usnea* 標本を調べて居る内に外形が *Usnea florida* (L.) Wigg. に似たものが多量にあった。よく見ると莖が基物に着生する部位は無色で黒くないし又成分としてウスニン酸の外にノルスチクチン酸とカペラット酸を証明することができたので之を新種とし *Usnea alisani* Asahina と命名し茲に発表することにした。本種の十分生長したものは長さ 30 cm に達して下垂し比較的少数の分枝の先端に大形の子器を附けて居るが或る箇体は高さ 6 cm 位止りで根元から枝を叢生し各枝の先端に同じく子器をつけ一見 *U. florida* (L.) Wigg. と見紛う許であるが上記の特徴を考慮しこれを *U. alisani* Asah. f. *condensata* Asahina の名で呼ぶことにする。

□森下正明・吉良竜夫編：**自然　生態学的研究**　今西錦司博士還暦記念論文集 pp. 497 1967。中央公論社。イワナの種の問題，昆虫の卵，昆虫の家族社会，飼い犬の集団秩序といった動物関係の中に，吉良竜夫・吉野みどり：日本産針葉樹の温度分布，沼田真：植物的環境の解析と評価，中尾佐助：農業起源論の 3 篇の植物に関した論文がある。第一のものは1945年に吉良が温量指数という扱い方を導入したことについて，林弥栄博士が西南日本で詳しく報じた針葉樹34種の分布のデータを採用して，今一度再確認したもので，ツガとコメツガ，ウラジロモミとモミなどの棲み分けが暖かさの指数による修正温度分布の相違としてきれいに示されている。そして亜寒帯樹種群と温帯樹種群の交代する境界は，暖かさの指数値 40～45°C month，温帯と暖帯とは 80～85°C month である。第三の中尾の論文は，前に本誌にも紹介した岩波新書の「栽培植物と農耕の起源」の土台となったもので，文献も例証もこちらの方に詳しいが出版が後れて逆になった。Murdock (1959) のそれと一致する結論で，1) 東南アジア起源の根栽によるウビ農耕，2) アフリカからインドにまで入った夏作雑穀のカリフ農耕，3) 東地中海中心の冬作麦のラビ農耕が重要なもので，日本の農耕はこの順序に導入された。そして 1) はイモ類，2) はシコクビエとヒエ，稲作は 2) の後続として 1) のフィルターを経て入ったとみており，それを追って 3) のムギの登場となったとする。なおこの外に新大陸の農耕があるが，これは前三者程に鮮やかな類型分析はできていない。　　(前川　文夫)